

中京大学図書館を分館から見た場合の覚書き： 分館の設置を振り返って

渡 辺 英 二

はじめに

1986年4月、視聴覚（AV）センターから当時の中京大学附属図書館（現名古屋図書館）に人事異動となった。その頃、分館と言えば、豊田キャンパスにある中京大学附属図書館豊田分館があるだけであった。その後、1990年度に図書館分室（法学部9号館）、1994年度にライブラリーサービスセンター、1998年度に法学文献センターが建設、設置された。またその間に中京大学附属図書館の名称は、総称として、中京大学図書館、個別には名古屋図書館（NL）、ライブラリーサービスセンター（LSC）、法学文献センター（LLC）、豊田図書館（TL）と呼称されるようになった。また名古屋図書館は2013年度に新築されている（詳しい年代等は、中京大学の年史等参照すれば記載されている）。実を言えば、豊田図書館以外の各館は、すべてその開設準備から開館時の運営、現場の担当に僭越ながら私が関わってきた。平たく言えば、今度、分館ができるから、そこに行って分館開設設置準備業務を命ぜられたということになったのであった。便宜上、名古屋図書館を本館、ライブラリーサービスセンター、法学文献センター、豊田図書館を分館として話を進めていくこととする。

1 図書館分室について

図書館に配属された最初は、外国雑誌の整理業務を担当した。業務の概要は最新号の外国雑誌が図書館に到着した時点で小型引き出しに格納

されているビジブルという用紙にタイトルごとに時系列順に受入記録を記入し、各号が増えてきたらそれらを適当な複数冊子にまとめたものを製本に出して、製本単位でデータ登録して書架に配架する作業である。当時は、コンピュータによる図書館システムはまだなく、製本雑誌の台帳、目録カードもすべて手で書くか、外国雑誌であればタイプライターで打って作成していた時代である。そうこうするうちに法学部棟に政治学・法学関係の和洋の製本雑誌を移動して、法学部の教員、学生の利用に供するという要望が挙がり、1990年度より9号館の建物を図書館分室にして使用することとなった。その任を私が担うこととなり、移設のための準備を始めた。記憶をたどればできあがった分室の書架数を数え、移設される製本雑誌をどの位置で何冊ずつ配架するかを計算した覚えがある。大きく書架は2つの部屋に分かれ、事務室のある部屋の書架には、和雑誌と洋雑誌、もう1つの部屋の書架にアメリカの各州の裁判記録を収めた National Reporter System の全シリーズ、イギリス議会上院、下院の議事録をまとめた Parliamentary Debates (別名 Hansard) が収められた。全ての製本雑誌がうまくおさまるだろうかと引越しが終わるまで不安であったが、無事に収められた時は安堵した記憶がある。割り当てられた要員は、私一人で昼休みは、食事中という札を入口にかけて対応していた。資料は全て製本雑誌のみということで貸出禁止・館内閲覧のみの扱いであった。事務机のある部屋には、事務机1つ、閲覧用の机が数台あるのみで、入った途端に閑散とした風景が見られた。入りづらいのか入口を入ってすぐに引き返す利用者もおられた。それでも宿題とかの関係で必要に応じ、利用者はそこそこにあった。休暇を取る場合は、本館(名古屋図書館)から代わりの要員が来てくれた。小さな部屋ではあり、残念ながら貸出可の図書(政治学・法学関係)を入れるスペースはなく、法学文献センターの開設まで待つことになった。私の業務期間はなぜか1年で、本館に呼び戻され、代わりの方が行くこととなった。

2 ライブラリーサービスセンター（LSC）について

図書館の作業が1989年度にコンピュータ化され、資料のデータ入力も作業用端末機で入力するようになってから4年後、1993年度頃、名古屋キャンパスにセンタービル（当初はインテリジェンスビルの呼称）が建設され、そこに名古屋図書館の開架資料（主に和図書）を持っていく計画が立てられた。図書館がセンタービルの3階と4階のフロアのおおよそ半分をもらうということで話が進んだ。当時、私は和図書の整理係を2年した後くらいでちょうど名古屋図書館の閲覧係となっていた。なぜか私がそこに行って担当することとなり、ライブラリーサービスセンターが1994年度にセンタービル内に正式に開設されてから1年くらいは名古屋図書館とライブラリーサービスセンターの閲覧係を半々で務めていた記憶がある。当時のライブラリーサービスセンターの図書の収蔵能力は10万冊くらいで、開設当初はその半分も配架されていなかったかと思う。参考図書以外はほぼすべて貸出可の図書が配架されており、閲覧カウンターも当時は離れて2つあった。1つは図書の貸出・返却用でもう1つはビデオ等の視聴覚閲覧用である。視聴覚資料の書庫、視聴覚ブースも設けられていた。当時は視聴覚センターが隣接されており、組織的には違うが共同で利用者向けのサービスをしていた。貸出・返却の業務が主でパート職員が4名（途中から3名）いて対応していた。当時直接は関わらなかったが、名古屋図書館からライブラリーサービスセンターへ和図書を移設する作業は、やはり書架棚への冊数配分をして、引越前には該当の書架横にタンボールに入った図書が積まれ、そこから出して書架に配架するのはほぼ当時のスタッフ全員で行った。当初は書棚の建付けが悪く、図書が棚からよくひっくり返り、後に改善された記憶がある。5年くらい担当したと思う。

3 法学文献センター（LLC）について

1997年度に政治学、法律学の製本雑誌だけでなく、和洋図書も収蔵でき、貸出カウンターも設置し、貸出の利用に供することのできる法学文献

センター設置（9号館）の話が挙がった。法学部との共同で行われ、当時法学部にあった法学部資料室の図書、雑誌も一緒に移管して収蔵・設立するというもので、専門図書館的意味合いのある分館の構想であり、1998年度に開設された。誰が担当で行くかという話になり、なぜかまた私が行くことになった。今回は図書館分室の時より、移動は大規模で名古屋図書館にあるすべての資料（和図書、洋図書、カレント和雑誌、製本和雑誌、カレント洋雑誌、製本洋雑誌）を法学文献センターに移設することとなった。ちょうどその時、私の担当は、洋雑誌整理であったのでまともな法学文献センターの洋雑誌書架の配架の棚割り計算をすることとなった。今回は和図書、和雑誌については閉架書庫にも開架書架にも配架するということで本格的な図書館の規模となった。貸出・返却カウンターのそれなりの形態を備えたものが配置された。日常業務は、私とパート職員2名で賅われた。法学文献センターには2年いて、その後、私立大学図書館協会の会長校の業務と名古屋図書館閲覧の業務で名古屋図書館へ戻った。

4 名古屋図書館（NL）について

1号館にある名古屋図書館が老朽化のため、立て直すこととなった（2008年度ごろから計画が具体化し、2013年度4月に正式オープンした）。当時の旧名古屋図書館を立て直した場合、建築法の改正等の事情により、従来の3分の1くらいの容積しか書庫を設置できないということが判明した。関係者に知恵を絞っていただき、協議された結果、自動化書庫を新名古屋図書館に設置し、必要な書庫の容量を確保することとなった。今回は、前述の各館への資料の移設とは規模が違い、50万冊レベルの資料を移動させなければならなかった。手順としては、旧名古屋図書館の蔵書を先に完成する6号館の自動化書庫に全て移し、一部6号館の閉架書庫に振り分け、その後隣接する1号館の開架書架完成後、自動化書庫から開架書架に配架する資料を取り出し、開架書架に配架するといった手間のかかる作業であった。これら一連の引越作業はさすがに業者に委託して行わ

れた。この新名古屋図書館建築の計画が持ち上がった時、私は他部署の配属であり、関係ないと思っていたが、新館の話が持ち上がると関わるといふジンス通り？名古屋図書館に所属が戻り、準備計画と作業に携わった。

5 各館の特徴と機能

(1) 名古屋図書館 (NL)

本館として、従来より対外的に他大学図書館、業者等折衝をする窓口となる。開架書架と閉架書庫（自動化書庫含む）を持ち、資料収集の要となる。具体的には、資料の発注、受入、整理、配架、貸出・返却、参考業務、相互貸借等を行う。現在、学習図書館と研究図書館の機能を持つが、ライブラリーサービスセンターができて、名古屋図書館の開架資料がライブラリーサービスセンターに移ってからは、新名古屋図書館ができるまで研究図書館の機能を持つだけの時期もあった。その時期は、開架エリアには、参考図書があるだけの殺風景なフロアで古い木製の学習用机と椅子が並んでいて、利用者もまばらな状態で、ライブラリーサービスセンターに利用者を取られた感があった。当時の懸念事項として平日 16 時から高校生がライブラリーサービスセンターを利用しに来られ、ライブラリーサービスセンターが高校生で占められる割合が多くなり、本来の利用者の中京大生に迷惑がかかることもあり、高校生は 16 時から名古屋図書館閉館の 18 時までは名古屋図書館へ誘導し、ライブラリーサービスセンターの利用集中の緩和を図った時期もあった（18 時以降はライブラリーサービスセンターの利用を許可した）。グループ学習室、ラーニングスクエア（ラーニングコモンズ）を持つ。



(2) ライブラリーサービスセンター (LSC)

1994 年度開設当初は、開架図書を集めた学習図書館として本学学生を中心に利用者が集中した。センタービルにあるので八事の地下鉄からの

アクセスもよく、また新しいせいもあってか学外者の利用も多かった。主に資料の貸出、返却、簡単な参考業務が仕事である。ビデオブース（今はDVDも）も設置されており、それも利用が多かった。



開館当初は、開講期の平日 20 時まで開館し、日替わりの当番で職員が 2 人残った。数年で開架書架スペースが満杯となり、スペース確保のため出版年等で基準を決めて定期的に資料をライブラリーサービスセンターから名古屋図書館自動化書庫へ運び入れた。グループ学習室は持たない。

（3）法学文献センター

名前の通り、校地Ⅱの9号館にある、政治学、法律学の資料を集めた主に法学部の学生、教員のための専門図書館である。開架書架と閉架書庫を備え、貸出、返却、簡単な参考業務を行う機能を持つ。アクセス的には地下鉄の八事駅より、八事



日赤駅の方が感覚的に近い感じがある。名古屋図書館からは個人差はあるが、歩いて8分くらいの距離である。数は少ないが、グループ学習室を持つ。数年で書庫が満杯となり、National Reporter System、Parliamentary Debates等の資料を名古屋図書館の自動化書庫へ移設して狭隘化への対応をした。

（4）豊田図書館

豊田キャンパスにある現代社会学部、工学部、スポーツ科学部関係の蔵書に重きを置いた図書館（当初は、スポーツ科学部の前身の体育学部のみであったが）で旧名は、中京大学附属図書館豊田分館と長いものであった。改名のきっかけは、館名



が長いと表記に手間がかかるし、ゴム印等を作成する際にも文字数が長くなり、何かと不便さがでてくるということから 1989 年度に改名された。同時期、名古屋の本館（名古屋図書館）が中京大学附属図書館から中京大学図書館へ改名されたのを受けてのことである。豊田キャンパスの図書館としてこれ 1 館しかなく、当然のことながら豊田キャンパスの学術情報の宝庫として重要な位置にある。貸出、返却、参考業務、相互貸借の業務を扱う。豊田キャンパスは、町中には位置しておらず、公共図書館からも遠いせいか、近隣の方の豊田図書館の利用は多い方と思われる。地域社会への貢献、情報資源の社会還元と共通利用の観点からも豊田図書館の役割は重要であろう。

（５）本館と分館

中京大学図書館の数が増えたということは以下の事象が発生することになる。

① 集中管理から分散管理へ

中央館 1 館だけであれば、資料の管理、図書館要員の管理等は一元的に集中し、状況把握も容易であるが、館が増えれば増えるだけ、管理は多元化し、分散してしまい、それらを機能的にまとめ、コントロールするのに手間がかかる。館同士の連絡を密にし、協力体制を取る必要が出てくる。また要員もその分増やす必要もあり、特に閲覧・貸出カウンターの要員は必須となる。当然、それだけ人件費もかかる。

② 本館と分館について

本館と分館について、このような見解がある。

「Robert B. Downs のことばを借りれば、〈理論的には、部局図書館の図書は、その部局の人だけに興味のあるものだといえるが、実際には、他の学部や研究所の人びとの役に立たないような資料はほとんどない。生物学者は化学に、化学者は物理学に、物理学者は数学に興味を持つ。あるコレクションを別にして、これは、ある個人、またはある部局にだけ関係のあ

るものだということは不可能である)。言いかえると、今日の大学では、どれほど重要な部局図書館でも、その所属する部局の教官や研究者にだけ奉仕する孤立した単位の図書館というものはありえない。こう考えてくると、大学の部局図書館が、次のような相互理解を深め合うことが、何よりも急務だと思われる。すなわち、大学のあらゆる図書資料は、全学共通の知的文化財であって、ある部局図書館の蔵書は、関連する専門分野の図書館の蔵書を補うものであり、同時に、他の部局図書館の新しい追加資料は、自己の図書館に対する新しい追加をも意味する。このような弾力性のある態度を持ってはじめて、全学の図書資源の有機的な活用を期待しうるのではなかろうか。(医学図書館 10 巻 3 号、1963 年 6 月：本館と分館—医大図書館における集中制と分散制—：改善と渦の中から一部局図書館との調整連絡—、青野伊予児)」。これは分館が専門図書館的な意味合いを持った場合の例であるが、分館の資料が限られた専門的分野の研究者に限定利用されるのではなく、各館が補完し合うという理念が述べられている。

一方中京大学図書館の分館の中で、法学文献センターは、政治学・法律学という専門性は帯びているが、本館の名古屋図書館からみてライブラリーサービスセンターと豊田図書館の 2 館は専門性というより、どちらかというと距離的に離れている意味で（特に豊田図書館は）、ただ分館として仕分けされてしまった感がある。名古屋キャンパスの中でもライブラリーサービスセンターができた当時は、目新しい新館として見られたが、開架書架しかなく、名古屋図書館は閉架書庫のみ残しており、ただ館を距離的に 2 つに分離したという意味での資料所在分けの性質を各々帯びていた。しかしながらライブラリーサービスセンターは、地下鉄の出入口から一番近くアクセスもよく学内・学外利用者を問わず、大いに利用されていた点では、画期的な図書館サービスの拠点であった。できればまた欲を言えば、当時ライブラリーサービスセンター建設に伴い、名古屋図書館を無くし、その閉架書庫の資料も丸ごとライブラリーサービスセンターへ移管し、開架書架と閉架書庫の両方備えられた新図書館としてライブラリー

サービスセンターが機能できれば1館集中管理が保てたのであるが、スペース等の関係で無理な状況であった。因みに名古屋図書館とライブラリーサービスセンターの距離は、歩いて約5分の近さである。後年、東京の立教大学図書館を見学した時、元々複数の建物にあった図書館を統合して1つの建物にまとめた話を聞いて統合もありうるという感を持ったことがある。立教大学の「池袋図書館は、それまで池袋キャンパスに点在していた図書館を統合・一元化し、2012年11月に全面開館しました。収蔵可能冊数200万冊、閲覧席数1520席を誇る、国内の大学でも屈指の大規模図書館です。総合学習図書館および研究図書館としての2つの機能を維持するとともに、多様なニーズに対応し利便性を向上させる」(立教大学図書館ホームページ <http://library.rikkyo.ac.jp/institution/> より)。とあるように統合のよい事例であろう。本館のみでよいのか、必要に応じて分館を設置するのがよいのかは、一朝一夕で判断できる問題ではないことは、重々承知しているが、分館を経験している中京大学図書館としては、分館の利点を活かしていくことを今後も模索していくことは必要であ

図1：中京大学図書館各館別担当業務表

キャンパス	名称	館種	図書・雑誌の発注	電子資料の発注	図書受入	新刊雑誌受入	図書・製本雑誌整理・装備	電子資料整理	閲覧・貸出	参考業務	文献複写等相互協力(学外)	閉架書庫(配架等)	支払伝票処理
名古屋	名古屋図書館	本館	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ライブラリーサービスセンター	分館				○			○	○			
	法学文献センター	分館				○			○	○		○	
豊田	豊田図書館	分館	○	△	○	○	○	△	○	○	○		

△：2023年度途中から

ろう。

「また名古屋大学の図書館は、総合大学となって以来中央図書館制度がとられ、強く centralization をうち出したが、その後緩和されていわゆる『調整連絡』した形になっている。すなわち、学部に分室がおかれ、全く名のみではあるが現在は図書掛もおかれ、機構の上では学部の図書館としての形がととのえられてきたのである。そして、図書の整理は中央図書館(本館)で集中的に行ない、学部の図書掛は、利用者への奉仕がその主な仕事となっている。また本館では、全学図書の集中整理に伴って、単位カードの作成や総合目録の編成まで担当しそのほか、本館図書の管理、中央館としての相互貸借・複写等の仕事がある。」(『医学図書館 10 巻 3 号、1963 年 6 月：本館と分館—医大図書館と中央図書館との関係、武居権内』)とあるように本館は、利用者への奉仕のほかに資料の目録整理、相互貸借、複写等の参考業務全般があるが、分館は、利用者への奉仕に限定した業務になっていることが当時の状況で読み取れる。因みに中京大学図書館では現況、業務内容から見て、利用者への奉仕が主体であるライブラリーサービスセンターと法学文献センターは分館の範疇であるが、豊田図書館は、発注(紙媒体資料)から受入、資料整理の業務を担っており、分館でありながら独立した性質を有する部分もある(豊田図書館はかつては支払業務も行っていた時期もあった)。

③ 学内他館相互協力(相互取寄せ)

分館がある以上、本館は本館で分館は分館で単独で運用していくことは資料の提供の面から見ても非効率であろう。本館のことは知らないよ、分館のことは勝手にやったらという態度では組織としても成り立たないのは明白である。ここに相互協力という概念が生まれてくる。

豊田図書館所蔵の資料を名古屋キャンパス所属の利用者が利用したい場合、わざわざ名古屋から遠方の豊田まで出向かなくても名古屋図書館(もしくはライブラリーサービスセンター、法学文献センター)の貸出カウンターへ依頼すれば、豊田キャンパスにある豊田図書館にある資料を名古屋

キャンパスの各依頼館へ取寄せてもらうことができるサービスは重要である。

2022年度蔵書検索結果から直接、遅まきながら整備した図書館システムを使った資料検索結果からそのまま学内他館資料の取寄せができるサービスを開始した。

以上、各館の業務を仕分けた表を参考に載せることとする。(図1：中京大学図書館各館別担当業務表)

(6) 電子資料を通しての遠隔資料閲覧

近年、IT化の波に乗って、紙媒体ではない資料、いわゆる電子ジャーナル、電子ブック、データベース等の電子資料が中京大学図書館でも増えてきた。わざわざ図書館へ出向かなくても、ネット環境とパソコンがあればそれらの電子資料が利用できる状況である。時にここ数年、コロナ禍もあって、この電子資料の遠隔閲覧は重要な意味を持ってきた。と同時に本館、分館の枠を超えた資料の提供形態である。引いて言えば、本来、本、雑誌が置いてあるのが図書館であろうに、紙のような物体の感触のない電子媒体の資料は、一見この書架に置いてあるといった感覚ではない、正に電子の世界での資料形態である。図書館とは何ぞや、という命題を突き付けられている。

おわりに

中京大学図書館の発展を分館設置の観点から、概観してきた。今後、中京大学図書館は、館数は減ることはないと思われる。分館を含めたこの現況でいかに中京大学図書館を利用者へのサービスを主眼として維持・改善・発展させていくかは大きな課題であろう。